

保育者のふり遊びへの関わり — 0～2歳児に焦点をあてて —

石川 洋子*

Educational Approach to Pretend Play in Nursery Teachers Focusing on Age of 0 - 2 Year Old

Hiroko ISHIKAWA

要旨 ふり遊びが象徴的思考へつながることが指摘され、これと共に大人の関わり的重要性が注目されている。これは、低年齢児の教育を担っていく保育者にとっても大きな課題であり、どのように関わりを積み重ねていけばよいのか、0～2歳児のふり遊び・見立て遊び等に焦点をあて、子どもの言動や保育者の関わり、遊びの変化が記述されたエピソードを分析検討した。

0歳児では、保育者は道具を使い、子どもに真似をさせながら遊びを教えていた。さらに物を道具としてだけでなく、それ以外の使い方をしながら遊びを教えていた。その物に、通常とは違う別のイメージを乗せることを教えているのかもしれない。また子どもに「ふり」も見せていた。言葉も伝えており、擬音語・擬態語のいわゆるオノマトペもよく用いられていた。1歳児クラスでは、保育者はふり遊びでは日常生活の中でよく目にする物や行為を使っていた。真似やふりを引き出しながら、そこに言葉も乗せていた。2歳児クラスでは、ふり遊びは単なる言葉や行為の真似ではなく、特定の文脈を持たせるようにしていた。保育者は、イメージを広げる関わりも行っていた。友だちを意識し、子ども自身が自分のふり遊びに入れることもし始めていた。

保育者は、ふり行為が一時的な模倣にとどまらず、イメージしたり、ストーリー性を持つものに移行できるよう、また、仲間とも同じイメージが共有できるよう援助していた。保育者には、子どもがイメージしたり考えたりストーリーを持たせたりすることの意味と意義を十分に把握し、子どもとの関わり援助を行うことが求められる。

キーワード：0～2歳児・ふり遊び・ごっこ遊び・イメージ遊び・保育者

I. はじめに

子どものふり遊びが、象徴的機能や抽象的概念の発達につながるということが、多くの研究者により指摘されている。

子どもの遊びの実証的研究はピアジェから始まるが、これを引用しながら高橋は、子どものふり遊びの世界やイメージの形成・発達について、詳

細に分析している。子どもでは現実生活における体験が知覚・判断・認知能力を通してイメージとして蓄えられ、保管された記憶内容が遊びの文脈で、ふり行為が出てくるとした。また、物を他の物で代用するいわゆる「見立て」についても言及している。一方、イメージ量の増大は保管されているイメージの組織化と体制化をうながし、イメージ間を創造的に繋いだり新規なイメージを生産したりするという。そして、個人的なふり遊び

* いしかわ ひろこ 文教大学教育学部発達教育課程幼児心理教育専修

は集団的なごっこ遊びへと発展し、共同のファンタジーとして広がっていくとした。

大塚は、乳幼児期のふり遊び研究の動向と展望を整理している。それによると、上記のようなふり遊びの古典的研究は、ふりの産出を「みだてるもの（現実）／みだてられるもの（ふり・虚構）」という代理的な関係に着目して明らかにしてきており、ふり遊びの実態を把握する上で重要な知見を提供しているとする。そしてその後の研究では、「ふりの意識」が議論されるようになったとし、その中で、Leslieの「ふりというものを理解するために必要なモジュールが発達の早期に備わっているのであって、実際に情報を処理する認知的プロセスは無意識的なものである」という考えを紹介している。

またふりの理解を支える大人の存在についても実証され始めたとし、大人が示す「ふりシグナル」の研究について紹介している。「ふりシグナル」とは、ふり行為に付随する笑顔やアイコンタクト、効果音の多用、動作を繰り返すなどのさまざまなシグナルのことを指すといい、伴・内山の「子どものふり行為が単なる母親の行為の模倣ではなく、母親が笑顔を表出することで、子どもが遊びということを理解してふり行動を生じさせ、遊びを共有することができた」との考察を紹介している。そして、今後の研究には、コミュニケーション過程に着目した検討が求められるとした。またこれらの研究の知見をふまえ、ふりの理解の発達的変化モデルを提案している。

中道は、社会的ふり遊びに関して、年上のきょうだいとの関わりから、大人（他者）の存在の効果について検証している。その結果、年上のきょうだいがふり動作をして、トドラーを注視し微笑するといった特定の行動パターンを呈示した後に、トドラーはふり遊びに参加する傾向があることを示している。

辻・別府は、自閉スペクトラム症幼児におけるふり遊びの発達と支援について、観察をもとに報告している。そしてエピソードの分析をもとに、

象徴的機能が、自力で作りに上げられるものではなく、人と人との関係の中から生み出されるとされるが、自閉症児においても同様と考えられるとしている。事例の対象児もふり遊びを通して、二重表象をもち、自己と他者が違う役割や立場を独自にとれる存在であることを理解し役割交替遊びをするようになったが、それは母親の関わりによって引き出されたと推察されるとしている。

また、松本・菊地・清野は、ASDのコミュニケーションについて、意図の側面から理論的検討を加えている。そして、意図の定義、意図の認知的実在：ミラーニューロン、意図理解・調整・参照の観点から意図の問題を整理している。その中でミラーニューロンについて言及し、ミラーニューロンのもっとも重要な点は、他者の行動の目的に応じて反応することであるという説を紹介している。また研究者たちが、ミラーニューロンは観察された行為の意味を反映していると思なすようになってきていることも紹介している。子どもの発達における神経科学、脳科学の分野の研究は、今後ますます多くの知見を与えてくれるであろう。

以上、子どもの遊び、とくにふり遊びを中心に最近の研究を概観したが、子どもにおけるふりの意識への研究と共に、大人との関係の重要性の指摘が注目された。

Ⅱ. 研究の目的と方法

1. 目的

上記のように、ふり遊びに対する大人の関わり的重要性が注目されたが、この関わり方を考えることは、とくに低年齢児の教育を担っていく保育者にとって重要である。

子どもはふり遊び、見立て遊び、ごっこ遊びと、遊びを複雑にさせながら自らを発達させていく。子どもには、模倣する力や意味を理解する力があるが、これらをもとに、たくさんの経験の記憶を重ね、思考の抽象化やイメージ化が行われていく。保育者は、このような子どもの発達に即し

ながら、どのように関わりを積み重ねていけばよいのか、保育現場にいる保育者の関わりの分析を通して、明らかにしたい。

この目的のもと、保育の場におけるふり・見立て行為、ごっこ遊びやイメージ遊び等における子どもの言動や保育者の関わり、これによる遊びの変化を記述されたエピソードを分析し、よりよい保育者の関わり方を考察していく。

2. 方法と調査対象

(1) 方法

保育所や幼稚園などで実習やアルバイト、ボランティアを行った学生に、子どものふり遊び、見立て遊び、ごっこ遊びと、印象に残った保育者の関わりや子どもの変化等について、エピソードを記述してもらう方法をとった。

(2) 調査対象

調査対象は、幼稚園実習（2週間）を行った大学3年生（女性42名、男性2名、計44名）と保育所実習（2週間）を行った大学4年生（女性43名、男性2名、計45名）、合計89名である。

(3) 実施時期

幼稚園実習2週間と保育所実習2週間が終了し、研究の目的と方法、倫理的配慮について説明し、質問紙調査に同意が得られた者に、2021年7月、調査票に回答してもらい回収した。

(4) 調査票

調査票の構成は以下の通りである。なお、調査対象者および対象の園名などはすべて無記名である。

1) フェイスシート（所属・学年・性別）

2) 実習中、あるいはアルバイト・ボランティア中に会った子どもたちのふり遊び、見立て遊び、ごっこ遊びと保育者の対応について、印象に残っているエピソードを以下の点から記述してもらった。なお、保育者の対応には、実習中の実習生の対応も含まれている。

1. 子どもの年齢・人数

2. 保育者・実習生の関わりの有無とその内容

3. 遊びの内容・広がりや変化

Ⅲ. 結果と考察

1. 保育者の関わりによる遊びの変化

(1) 保育者の関わりによる変化の有無

89名の学生により記述されたエピソードの延事例数は、230件であった。これらを子どもの年齢別にみると、表1の通りであった。

表1 エピソードの年齢別事例数

	事例数	%
0歳児クラス	9	3.9
1歳児クラス	27	11.7
2歳児クラス	52	22.6
3歳児クラス	36	15.7
4歳児クラス	34	14.8
5歳児クラス	46	20.0
異年齢	26	11.3
合計	230	100.0

この230例について、子どものふり遊び等への保育者の関わりによる遊びの変化について、各学生から記述されたものについて検討した。

保育者の関わりや介入により、遊びに変化があったかどうかについて、年齢別にみたものが、表2である。

子どもの年齢が0歳、1歳の場合、保育者の関わりによって遊びの内容が変化した事例がそれぞれ77.8%、70.4%と7割を越えている。一方、2歳になると、遊びに変化があった事例が57.7%となり、その後年齢が上がるに従い保育者により遊びに変化はなくなっており、5歳児では19.6%となっている。また、保育者が遊びに関わらず、子どもだけで遊びが成り立っている事例も5歳児では50.0%あった。異年齢の集団の場合も、保育者の介入による遊び内容の変化があった事例は19.2%と少なく、介入自体をしない事例も38.5%となっている。カイ二乗検定で有意差が見られた($p<.001$)。

保育者は、子どもが低年齢ほど意識して遊びに

関わり，教育的な配慮を行っている。その結果，子どもの遊び内容に変化が生じることが多く，実習生の印象にも残っている結果であった。

表2 保育者の関わりによる遊びの変化の有無
%(N)

	変化有	変化無	関わりなし	合計
0歳	77.8	11.1	11.1	100.0 (9)
1歳	70.4	11.1	18.5	100.0 (27)
2歳	57.7	13.5	28.8	100.0 (52)
3歳	42.9	25.7	31.4	100.0 (35)
4歳	35.3	23.5	41.2	100.0 (34)
5歳	19.6	30.4	50.0	100.0 (46)
異年齢	19.2	42.3	38.5	100.0 (26)
合計	42.4	23.1	34.5	100.0 (229)

*** p<.001

(2) 保育者の関わりによる遊びの変化の内容

保育者は，とくに0歳～2歳児において子どもへの関わりを意識して行っていた。そこで「ふり」遊びや「見立て」遊びなどを中心に，0歳～2歳児に焦点をあて，保育者の関わりやその内容，遊びの変化を記述内容から分析検討した。

①0歳児における保育者の関わりと遊びの変化

0歳児クラスにおいて保育者の関わりと遊びの記述があった9例について，その内容から下記のように4つに分類した(表3)。

1. 「真似」を引き出す
2. 道具を使って遊びを教える
3. 「ふり」を教える
4. 言葉(擬音語・擬態語)を教える

子どもは0歳児クラスであっても，実年齢が1歳を越えている場合も多い。0歳での保育者の関わりでは，1のように，保育者は歌遊びや手遊びなどを通して，子どもが自身の身体を使った「真似」を引き出している。保育者は子どもと個別に関わりながら，褒めたり認めたりしながら関わっていた。

2は，やはり真似を引き出しているのであるが，そこに道具を使っている。保育者は，マラカ

スや積み木を使って子どもに真似をさせながら，「遊び」を教えている。事例90では，ミルク缶をたたいたり転がしたりして見せており，子どもも真似て音を出したり転がしたりしている。物を道具としてではなく，それ以外の使い方をしながら遊びを教えていた。その物に通常とは違うイメージを乗せることを教えているのかもしれない。

3のように，保育者は，0歳児に「ふり」をする行為も見せている。おもちゃをご飯に見立て食べるふりをしているが，子どもはその真似をしているうちに実際に口に入れてしまい，保育者が止めている。このような繰り返しの中で，子どもは保育者の食べるふりという行為を真似，その意味を知っていくのであろう。

表象の世界を教えるためには，4の言葉を教えることは重要であろう。言葉は，物や行為に抽象的な音を乗せていくということであり，表象や抽象の世界を教える大事な手立てである。0歳児では，言葉の中でも「もぐもぐ」や「パクパク」などの擬音語・擬態語，いわゆるオノマトベもよく用いられている。子どもには，わかりやすく，その意味もより伝わりやすいと思われる。

②1歳児における保育者の関わりと遊びの変化

1歳児クラスにおいて保育者の関わりと遊びの記述があった27例については，その内容から4つに分類した(表4)。

1. 「真似」を引き出す
2. 「ふり」を引き出す
3. 「見立て」を引き出す
4. 言葉や意味を教える

1のように，子どもは保育者の電話で話す動作や「おいしい」という言葉を真似たり，食べるふりを真似たりしていた。

2では，子どもはふりの意味を理解し，自分からバックから中身を出すふりやラーメンをすするふりをしている。保育者はその場の文脈に依じて，ふりを引き出している。その際には，動作の意味を伝える言葉，真似やふりを引き出す言葉を

かけていた。

3の見立てを引き出す場合にも、「何ジュースなの？」というイメージを引き起こす言葉をかけたり、一緒にブロックの車を走らせる動作と「ブーブー」という言葉を共に伝えていた。

4では、保育者は、単に言葉を教えるのではなく、使い方や言葉・行為の意味を伝えている。保育者が示すあまりなじみのない行為であっても子どもは、保育者との間で交わされる文脈の中で、その意味するところを理解していつている。

真似やふり、見立てを教えたり引き出す場合、日常生活の中でよく目にする物や行為を使っていた。ご飯に見立てる、ご飯を食べるふりをする、車に見立てる、電話をするふりをするという行為が多い。絵本を使ったふり遊びも行われていた。子どもも日常生活の中で何度も繰り返し行っていることなので、見立てる行為やふりをする行為も引き出されやすいのであろう。

真似やふり、見立てを引き出す際、そこに言葉も乗せている。日常生活でなじみのある物を使いながら、そこに抽象性の高い言葉やふり、見立ての世界も一緒に伝えるような重層的な積み重ねが行われていた。

③ 2歳児における保育者の関わりと遊びの変化

2歳児クラスにおいて保育者の関わりと遊びの記述があった52例について、その内容から5つに分類した(表5)。

1. 「ふり」「見立て」「模倣」を引き出す・行う
2. 言葉や意味を教える
3. イメージを広げる
4. 他児(第三者)が入る・入れる
5. 役割・立場を意識させる

2歳児クラスになると、子どもたちは、1の「ふり」「見立て」「模倣」をよく行っている。記憶をもとにした「ふり」行為も具体的になっていた。また、図鑑の車を指でさわりながら乗ったつもりになったり、保育者のふりをしながら「もうすぐママ来るよ」という言葉の模倣も乗せること

ができており、イメージの世界がより確かになっていた。

2のように、保育者は言葉や意味も伝えており、暑いー涼しいといった反対語を使いながら、概念の定着も図っていた。

3のイメージを広げる関わりもよく行われていた。子どもが持っているレストランというイメージを保育に取り入れたり、コップやパーティーなどの道具を使いながら、よりイメージを広げ、ストーリーも長くなるようなさまざまな工夫が行われていた。子どもが扉に見立てていた絵本を長いパーティーに変え、インターホンをつけることにより「ピンポン」ごっこになり、日を越えてより多くの子どもの遊びが続くということも出てきている。単なる行為や言葉の真似ではなく、子どものイメージや文脈、ストーリーを大事にしながら、それを広げるように行われていた。

さらに、4のように、第三者(他児)を意識し、子どもが自身のふり遊びに入れることもし始めている。他児もふり遊び、真似遊びを十分に理解しそこに入ることができている。2歳児は、仲間を発見する時期と言われているが、仲間を発見し、同時にその仲間と同じイメージの世界を共有することもできるようになる年齢のようである。

5のように子ども自身が真似している者の役割や立場を意識させるような関わりも行われていた。

2歳児に対して保育者は、ふり行為、模倣行為に乗ってその文脈の中で、行為を一時的な模倣にとどまらずストーリー性のあるものに移行できるよう、また、仲間とも同じイメージが共有できるよう、ふりをする対象の性格や役割も意識できるよう援助していた。

表3 保育者の関わりとふり遊び・見立て遊び・ごっこ遊びの変化(0歳児)

<p>0歳児</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「真似」を引き出す <ul style="list-style-type: none"> ・保他児と歌遊び→子それを見て一人でお腹をさすって保と同じ動きをする(事例78) 2. 道具を使って遊びを教える <ul style="list-style-type: none"> ・保マラカスを振ってみせる→子マラカスを受け取ると同じように鳴らそうとしている(事例75) ・保歌いながらつみきを積む→子歌も真似ながら積む, 言葉も真似ようとする(事例209) ・保ミルク缶をたたいたり転がして見せる→子真似て音を出す, 転がす, 追いかける(事例90) 3. 「ふり」を教える <ul style="list-style-type: none"> ・保おもちゃを食べるふり→子食べる真似をする, 口に入れたので保が止める(事例44) 4. 言葉(擬音語・擬態語)を教える <ul style="list-style-type: none"> ・保食事の際の言葉かけ「もぐもぐしてね」「あむあむだよ」「かみかみね」(事例76) ・保食事の際の言葉かけ「おてて, ごしごしするよ」(事例91)

保 保育者, 実 実習生, 子 子ども

表4 保育者の関わりとふり遊び・見立て遊び・ごっこ遊びの変化(1歳児)

<p>1歳児</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「真似」を引き出す <ul style="list-style-type: none"> ・実受話器を耳にあて「もしもし〇〇くん」→子嬉しそうに真似て繰り返し同じ動作(事例46) ・子皿に食べ物をのせ実に渡す→実「いただきます」食べるふり→子真似て食べるふり→実おいしいね→子真似て「おいしい」→保一連のやりとりを見ていて「〇〇ちゃん, 分けてあげてすごい」と声をかける→子それを聞いていた他児も「自分も」と真似る(事例59) ・子絵本の「のりまき」を真似て, 絵に合わせて切ったり巻いたりする動作, 自分なりののりまきも作る(事例43) 2. 「ふり」を引き出す <ul style="list-style-type: none"> ・実壁面の果物をつまんでバックに入れるふり→子バックの中身を出すふり(事例3) ・子5~6人で「こどもずかん」の絵本を見ている→実「これなんだ」→子「ラーメン」→実「ラーメンどうぞ」と一人一人に渡す→子ふーふーしてすすめるふり→子他児も「めんめんだ」と言ってすすめる真似(事例172) 3. 「見立て」を引き出す <ul style="list-style-type: none"> ・保「何ジュースなの?」→子チェーンリングをジュースに見立てて「りんごジュース」(事例34) ・子ブロックを車に見立てて遊ぶ→実「プープー」と言いながら一緒に同じことをする→子「プー プー」と真似(事例48) 4. 言葉や意味を教える <ul style="list-style-type: none"> ・実「これ何かな」→子「りんご」「いちご」(事例29) ・保「写真撮るよ」と撮る真似→子「カシャカシャ」と言葉も動作も真似てポーズ(事例30) ・実「アイス冷たい!」と頬を触る→子始めはきよんとした顔だったがひらめいたかのように「つめたい, おいしいね」(事例171)
--

保 保育者, 実 実習生, 子 子ども

表5 保育者の関わりとふり遊び・見立て遊び・ごっこ遊びの変化(2歳児)

<p>2歳児</p> <ol style="list-style-type: none"> 「ふり」「見立て」「模倣」を引き出す・行う <ul style="list-style-type: none"> 子おもちゃの携帯で通話するふり→実「誰と話してるの」→子「ママ」「もしもし」(事例21) 実車の図鑑を読む→子「これ乗ってみる」と言って絵本を指でさわって乗ったつもり(事例105) 子人形を寝かせたり保育者を真似て声をかける「もうすぐママ来るよー」「大丈夫よ」(事例221) 子先生を怪物に見立てて追いかけて、戦いを楽しむ(事例125) 言葉や意味を教える <ul style="list-style-type: none"> 子3人でままごとセットで料理をする真似→保「ぐつぐつぐつぐつ、熱い!熱い!」と声かけ→子にこにこする子、心配そうに保を見る子、真似る子(事例49) 実「暑いね」と手であおぐ仕草→子そっくり真似て「暑いね」→実「日陰は少し涼しいね」→子「涼しいね」と真似(事例142) イメージを広げる <ul style="list-style-type: none"> 保「今日はレストランです」→子気持ちよく行動できていた(事例15) 子真似てスカートをはく→実「アリエルみたい」→子「アリエルなの」(事例84) 保コップを使ってイメージが広がるように声かけ→子コップを使ってカフェごっこ(事例93) 子棒の上でバランスを取りながら歩く→実「落ちたらワニに食べられちゃう」保「あ、食べられちゃった」→子何度も足を地面につけて落ちたふり、食べられるスリルを楽しむ(事例71) 子絵本を扉に見立てる→保本をパーティーションに変更、インターホンをつける→子「ピンポン」として遊ぶ→子5人から10人に増えて次の日も遊ぶ(事例1) 他児(第三者)が入る・入れる <ul style="list-style-type: none"> 子箱を組み合わせて電車を作り車掌になり他児を乗せる(事例85) 実子どもの体を道路に見立てて車を走らせる→子真似て実の腕を道路に見立てる、他児の体も道路に見立てて走らせる(事例39) 役割・立場を意識させる <ul style="list-style-type: none"> 子バスに乗るごっこ遊びに夢中で名札をつけない→保「運転手さん!名札をつけましょう」→子応じる(事例14)

保 保育者, 実 実習生, 子 子ども

④ 3～5歳児における保育者の関わりと遊びの変化

3～5歳児クラスにおいて保育者の関わりと遊びの記述があった116例については、年齢ごとに下記のように分類した(表6).

<3歳児>

- 「ふり」「見立て」「模倣」ごっこ遊び・イメージ遊びを引き出す・行う
- 複数でのごっこ遊びに広げる

<4歳児>

- 「ふり」「見立て」「模倣」ごっこ遊び・イメージ遊びを引き出す・行う
- 役割を意識させる
- ストーリー作りを引き出す
- 個別の援助を行う

<5歳児>

- 「ふり」「見立て」「模倣」ごっこ遊び・イメージ遊びを引き出す・行う
- 役割を意識する・させる
- ストーリーや空想の物語を作る・推奨する

3歳児クラスになると、「ふり」「見立て」「模倣」、ごっこ遊び、イメージ遊びが盛んに行われるようになる。また自分のイメージもはっきりしてきて、それにこだわるようにもなる。保育者は、イメージがより広がるよう教材を用意したり言葉をかけたりしている。複数の子どもたちでの「ふり」「見立て」「模倣」遊びも行われている。2のように、ごっこ遊びの人数を広げるための援

助も行われていた。

4歳児クラスでは、「ふり」「見立て」「模倣」、ごっこ遊び、イメージ遊びはより盛んになり、保育者は多くはその場に参加しながらより具体性があり、イメージが広がるような援助や、役割がより明確になるような援助も行っていた。子どもによるストーリー作りも始まり、保育者は、ストーリーが広がるよう言葉をかけていた。一方、4のように、なかなか集団でのごっこ遊びに参加できない子どもに対し、個別的な援助も行っている。4歳になると集団に参加できない子どもはより目立つようになるが、このような個別の援助は、どの年齢においても行われているであろう。

5歳児クラスでは、「ふり」「見立て」「模倣」、ごっこ遊び、イメージ遊びはさらに盛んになり、子どもたちだけで遊びを広げたり、ストーリーを持たせたりするようになる。遊びもより具体的になり、役割も明確になりそれを演じることも上手になる。一方、ストーリーを作ったり空想の物語を作ることもできるようになる。

保育者には、子どもがイメージしたり考えたりストーリーを展開させたりすることの意味と意義を十分に把握し、子どもと関わり援助を行うことが求められる。

⑤異年齢における保育者の関わりと遊びの変化

異年齢の集団において保育者の関わりと遊びの記述があった26例については、その内容から3つに分類した(表7)。

1. 「ふり」「見立て」「模倣」ごっこ遊び・イメージ遊びを引き出す・行う
2. 低年齢児に合わせる
3. 異年齢の関わりを重視する

異年齢クラスでは、保育者は、「ふり」「見立て」「模倣」、ごっこ遊び、イメージ遊びを大事にし援助する一方で、遊びの内容を低年齢児に合わせてたり、または、あまり介入せず、見守る姿勢が多かった。異年齢児同士による遊びの教育的効果を意識しているものと思われた。

表6 保育者の関わりと見立て遊び・ふり遊び・ごっこ遊びの変化(3・4・5歳児)

<p>3歳児</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「ふり」「見立て」「模倣」ごっこ遊び・イメージ遊びを引き出す・行う <ul style="list-style-type: none"> ・子2人が皿に料理を乗せる、それぞれが作るふり→実食べるふり→子食べるふり(事例150) ・子ジャングルジムでのごっこ遊び→実「キッチンはどこ?」→子「ここ」「ドアはあっち」(事例206) ・子食べ物を持ってきてくれる、食べないと待っている→保しっかり食べるふりをする(事例6) ・子ブロックで船を作り遊ぶ→実「何をしているの?」→子「サメがいる」→保紙コップでサメを作る→子サメと並走したり船に乗せたりして遊ぶ(事例74) ・子輪になった段ボールをひきずって遊ぶ→実「車掌さん、出発進行!」の声かけ→子周囲の子がキラキラした目で興味を示し「シュッシュッポッポ」「〇〇駅です」と電車ごっこに発展(事例104) 2. 複数でのごっこ遊びに広げる <ul style="list-style-type: none"> ・子2人でケーキ作り→保客として入る「大きいケーキ作ってみようか」とバケツを持ってくる→子2人の距離が縮まりケーキ屋ごっこに発展(事例56) <p>4歳児</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「ふり」「見立て」「模倣」ごっこ遊び・イメージ遊びを引き出す・行う <ul style="list-style-type: none"> ・子一人の子が他児を見て「鳥さんみたい」→実「どれどれ」→子他児が「私もできる」と鳥真似ごっこが始まる、他児が「カエルもできる」と言い、動物真似ごっこが2~3日続く(事例192) ・保段ボールに「絵を描いてみたら」「届けてあげたら」→子段ボールに自分で作った物を入れ「ピンポン宅配便です」スタンプ、はんこも使って宅配便ごっこ(事例132)

<p>2. 役割を意識させる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子「お化けだぞー」他児も真似→実お化け屋敷ごっこを提案→子自分たちでお化けと客の役を決めお化け屋敷の探検やお化け鬼ごっこに変化（事例89） <p>3. ストーリー作りを引き出す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子2つのおもちゃを使って物語りを作り戦いごっこ→保の言葉を物語に反映させる（事例146） <p>4. 個別の援助を行う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子一人でパン屋さんごっこ→保「一人だと忙しくない？誰にお手伝いしてほしい？」→子「〇〇ちゃん」「一緒に遊ぼう」とお願いしに行く→2人でパン屋さんごっこ、他の子も入る（事例193） <p>5歳児</p> <p>1. 「ふり」「見立て」「模倣」ごっこ遊び・イメージ遊びを引き出す・行う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実魚釣りのスケッチブックシアター→子全員でリールを回し魚を釣る「釣った魚を食べたい」→子魚を調理して食べる遊びに発展（事例40） ・子スシローごっこ→保客として入る「まぐろありますか」「値段はいくらですか」→子本物のお寿司屋さんようになっていく（事例224） ・子カラフルなチェーンでスパゲティの見立て遊び→子1人の子が「白い色はうどんみたい」と言うとうどん屋さんになり、黄色はお金にしてごっこ遊びが発展（事例63） <p>2. 役割を意識する・させる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子4人で雲梯を汽車に見立てる、それぞれの役割を細かい表情や行動までそのシーンのように演じる（事例5） <p>3. ストーリーや空想の物語を作る・推奨する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子架空の鬼がいて、実と一緒に鬼から隠れることを楽しむ（事例151）

保 保育者, **実** 実習生, **子** 子ども

表7 保育者の関わりと見立て遊び・ふり遊び・ごっこ遊びの変化（異年齢）

<p>異年齢</p> <p>1. 「ふり」「見立て」「模倣」ごっこ遊び・イメージ遊びを引き出す・行う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子2歳児3人と3歳児が買い物ごっこ、3歳児がエプロンをつけてほしいと保に頼む、2歳児2人も真似、3人で部屋中を走り回る→保「いらっしゃいませ」と店員になる、「袋にお入れしましょうか」→子買い物ごっこになる（事例130） <p>2. 低年齢児に合わせる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子2・3・5歳児が家族ごっこ、3・5歳児が役やストーリーを考え2歳児はペット役、2歳児の猫の真似が上手→保2歳児の猫の真似を褒める→子全員が猫になって猫のものまね大会に（事例106） <p>3. 異年齢の関わりを重視する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子4～6歳4人でyoutubeごっこで動画作り、他児3人を呼び出してお団子作りを見せている→保まるで動画に映っているような動きや声かけ、子どもたちの邪魔にならないようにしていた（事例226）

保 保育者, **実** 実習生, **子** 子ども

IV. まとめ

ふり遊びに対する大人の関わり的重要性が注目されていることから、とくに低年齢児の教育を担っていく保育者にとっては大きな課題であると考へた。そこで、保育者が子どもの発達に即しながら、ふり遊び、見立て遊び、ごっこ遊びを広げるためにどのように関わりを積み重ねていけばよいのか、保育者の子どもへの関わりを分析を通して、明らかにすることを目的とした。

研究は、とくに0～2歳児の子どものふり、見立て遊び等における子どもの言動や保育者の関わり、これによる遊びの変化が記述されたエピソードをもとに分析検討した。

調査対象は、実習やアルバイトを経験した3・4年生89名、延事例数は230件である。

0歳児クラスでは、保育者は、マラカスや積み木といった道具を使い、子どもに真似することを引き出していた。さらに物を道具としてだけではなく、その使い方以外で遊びを教へていた。それはその物に違うイメージを乗せるということでもあろう。また保育者は、0歳児に「ふり」をする行為を見せている。おもちゃをご飯に見立て、食べるというふり行為である。子どもは、保育者の食べるふりを真似ながら、その意味を知り、表象を作り上げ、遊びにしていくものと思われる。言葉も伝えており、擬音語・擬態語のいわゆるオノマトペもよく用いられていた。

1歳児クラスでは、保育者は、真似やふり、見立てを引き出す場合、日常生活の中でよく目にする物や行為を使っていた。また、言葉を教へる際、使い方やその意味を伝えていた。抽象性の高い言葉を教へる場合にも、このようなふりや見立ての世界も一緒に伝える重層的な積み重ねが求められると思われた。

2歳児クラスでは、「ふり」「見立て」「模倣」遊びも単なる行為や言葉の真似ではなく、特定の文脈の中で行われ、「ふり」行為も具体的でストーリー性を持って行われるようになっていた。これらの行為の上に、保育者からの言葉が乗せら

れていた。子どものイメージや文脈、ストーリーを大事にしながら、それを広げるように行われていた。子どもは第三者（他児）を意識し、自分のふり遊びに入れることもし始めていた。保育者は、ふり行為、模倣行為に乗ってその文脈の中で、行為を一時的な模倣にとどまらずストーリー性のあるものに移行できるよう、また、仲間とも同じイメージを共有し、ふりをする対象の性格や役割も意識できるよう援助していた。

3歳児～5歳児クラスになると、「ふり」「見立て」「模倣」、ごっこ遊び、イメージ遊びは盛んに行われるようになっていた。保育者は、イメージがより具体的で明確になるように教材を用意したり言葉をかけたり、集団が大きくなるような援助をしていた。ストーリー作りも始まり、保育者はストーリーが広がるよう援助をしていた。

保育者には、子どもがふり遊びを行い、イメージしたり考へたりストーリーを展開させたりすることの意味と意義を十分に把握し、子どもとの関わりや援助を行うことが求められる。

引用文献・参考文献

- 高橋たまき (1989) 「想像と現実－子供のふり遊びの世界」ブレーン出版, 15-19
- 高橋たまき (1984) 「乳幼児の遊び－その発達プロセス」新曜社
- 大塚穂波 (2015) 乳幼児期のふり遊び研究の動向と展望, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要9, 1, 45-55
- 中道直子 (2016) 導かれた参加：年上のきょうだいと1－2歳児の社会的ふり遊び, 発達心理学研究27, 1, 23-31
- 辻あゆみ・別府哲 (2020) 自閉症スペクトラム症幼児におけるふり遊びの発達と支援, 岐阜大学教育学部研究報告・人文科学, 68, 2, 111-120
- 松本敏治・菊地一文・清野宏樹 (2018) ASDのコミュニケーションにおける意図の問題－意図理解・調整・参照, 植草学園大学研究紀要, 10, 9-20

内田伸子（1986）「ごっこからファンタジーへー
子どもの想像世界」新曜社

Anat Baniel, 伊藤夏子・瀬戸典子訳（2018）「限
界を超える子どもたち 脳・身体・障害への新
たなアプローチ」太郎次郎社エディタス

